

地域のレジリエンスにおけるソーシャル・キャピタルと記憶

—— 東日本大震災後の地域コミュニティについての議論をもとに ——

和 泉 浩

Social Memory and Social Capital in Community Resilience: Reconsidering Sociological Discourses on Post-Disaster Recoveries and Disaster Mitigations of Local Community after the Great East Japan Earthquake and Tsunami

Hiroshi IZUMI

Abstract

Despite the power of social capital and community resilience after disasters has been recognized, the post-disaster recoveries and disaster mitigations after the Great East Japan Earthquake and Tsunami have still continued to focus resources on physical infrastructures, based almost exclusively on data and knowledge of natural sciences. Against this backdrop or below the surface many sociological and ethnological studies on the Great East Japan Earthquake and Tsunami shed light on effective functioning of local communities and their social capital, or social networks for the post-disaster recoveries and disaster mitigations; local community enhances individual and community resilience. Some literatures point out the importance of local cultures and their traditional rituals or build environments and spaces of the rituals, and argue for the need for the “archive” of their memories because of the literally devastating effects of the Great East Japan Earthquake and Tsunami on local communities and their members, but they mainly select the cultural masterpieces of local community – macro-memory or Memory of community, like museums and galleries select and collect the masterpieces of humankind. This paper theoretically explores the relationships among social, collective memories, traditional rituals of local communities and social capital, and unveils the important functions of collective micro-memories of everyday life and social networks, which are too familiar to speak about, intentionally memorize – unspoken and pre-conscious, but one of the key factors for social capital and community resilience.

Key Words

Community Resilience, Social Capital, Social Memory, Disaster

強さを追及する戦略はいずれもその鏡像として脆弱性をつくります。 アンドリュー・ゾッリ&アン・マリー・ヒーリー

社会的インフラストラクチャーにたいする理解が進んでいるにもかかわらず、政策決定者たちはソーシャル・キャピタルの役割をしばしば無視し、道路、橋梁、家屋の再建といった標準的な物質的インフラストラクチャーへ資源を集中させ続けている……住民たちが戻り、新しい人々を来るようにさせる上でソーシャル・キャピタルの重要性を考慮すると、復興計画を作るとき、政策決定者たちはソーシャル・キャピタルについてより真剣に考える必要がある。 ダニエル・アルドリッチ

すべての集団において、最も保存したいと願望される価値や分類は身体の自動性に委ねられる。人々は過去が身体に沈殿している習慣の記憶において、いかによく記憶されるのかを思い知るであろう。 ポール・コナトン

1. はじめに——地域のレジリエンス

東日本大震災後、しばしば使われるようになっていく表現に「レジリエンス」⁽¹⁾がある。レジリエンスについて、京大・NTTレジリエンス共同研究グループは次のように説明している⁽²⁾。

「レジリエンス」には弾力性、復元力、回復力などの訳語があるが、私たちは「しなやか」という意味合いを持たせている。当該地域の抵抗力を超えるハザードによる「被害が発生して、影響を受けても、柳の枝のようにしなやかに立ち直る社会」を意味している。「レジリエンス＝しなやかさ」を高めるとは、ある程度の頑健さと、災害の影響を受けてもすぐに

回復する力を合わせ持つことである。(京大・NTT
レジリエンス共同研究グループ 2012 : 16)。

「レジリエンス」とともに「しなやかさ」という表現も、東日本大震災以降、よく使われるようになっていっている。たとえば、赤坂憲雄は『3・11から考える「この国のかたち」——東北学を再建する』のなかで、レジリエンスという言葉には触れていないが、次のように述べている。「フクシマ以降を生きるための、したたかにして、しなやかな思想を創らねばなりません」(赤坂 2012 : 59)。これをレジリエンスの思想と言い換えることもできるのではないだろうか。

レジリエンスや「しなやかさ」といった表現や考え方は、東日本大震災によって、特定のリスクの予測をもとに強化を行うという対策(より頑強にするという対策)の限界、つまりそうした対策のシステムは、「予想外」のリスクにたいして脆弱になり、被害をよりいっそう大きくしてしまうということが明らかになったことによるものである。たとえば、ある高さの津波を想定し、それを防ぐことを意図した堤防は、その高さの予測を上まわるものを防ぐことができず、堤防がある、以前は堤防で防ぐことができたなどの安心感をもたらし、また特定の数値の予測にもとづくハザードマップによって、ここまでは来ないという意識を生じさせることによって被害を拡大させてしまう、など。

アンドリュー・ゾリとアン・マリー・ヒーラーは、こうした状況について、ジョン・ドイルが使い始めた表現である「頑強だが脆弱」(robust-yet-fragile)を取り上げ、「予測される危険に対してはレジリエントだが、予期せぬ脅威にはきわめて弱いというシステムの複雑性を言い表している」(Zolli and Healy 2012=2013 : 35)と指摘している。ここで「システムの複雑性」と言われているのは次のような状況である。「混乱を増幅するのは、独自のスピードをもった多様なシステムが合成されて生じる破壊力である。このような相互作用を考慮しないかぎり、システムを改良する試みが長期間にわたって成功することはない」(Zolli and Healy 2012=2013 : 24)。

被害についての予測を行う場合、その被害との関連性の高い要因を選択し、それについて予測が行われる。ここでは、「現実」の著しい単純化が行われる。さらに、定義やモデルなどの違いによる予測の違いなども生じる。しかし、いうまでもなく現実には複雑なものであり、多様かつ多元的なシステムがそれぞれのスピードで動いており、それらがどのように結びついて被害をもたらすのかは、特定のモデルとそれにもとづく対策の予想を超えたものにならざるをえない(対策のためには「風が吹けば桶屋がもうかる」という複雑な状態の解明が必要に

なる)。レジリエンスは、「インプットがあればアウトプットは十年後でも分かるという前提で、専門家が計画を立て、その計画がそのまま政策として実践された」というシステムの限界から生じた考え方である(香坂編 2012 : 22)。つまりレジリエンスは、予測できない状況、備えることのできない状況にたいして必要になるともいえる(Norris et al. 2008 : 132)。

こうした関連性の高い要因を探し出し、(特定の意図と社会関係、権力構造のもとで)要因の選択を行い、それにたいして対策をたて、実施するというやり方は、医療における、疾患との関連性の高い要因を見つけ出し、そのなかから選択される「リスク・ファクター」と同じ問題を抱えることになる。さらに、当然と言えるだろうが、予防や早期発見、さまざまな要因の発見(創出)などによって、医療の領域が拡大するという「医療化」の問題とも重なる。東日本大震災以降、「減災化(防災化)」の領域が拡大しているが、これは医療化と同じように、さらに拡大していくことだろう。学問にもそうした状況が生じている(本稿もその例外ではない)。またイヴァン・イリイチが指摘した「病院化社会」の問題点についても同じようにあてはまる。防災対策(あるいは支援)が進めば進むほど、それへの依存が高まり、人びとが自分たちで対処する能力が弱まる。まさにこうした問題が、防災・減災の問題点として指摘されている。

アーロン・アントノフスキーは、疾患との関連性の高い要因、つまりリスク・ファクターに注目する疾病生成モデルにたいして、同じ条件にありながら健康でいられるという、健康との関連性の高い要因に注目する健康生成モデルを提起したが、レジリエンスはアントノフスキーの健康生成モデルと結びつく考え方ともいえるだろう。

F・H・ノリスらは、レジリエンスについてのこれまでのさまざまな分野での多くの定義について検討し、その大部分のものが強調するものとして「攪乱、ストレス、逆境に直面したとき、うまく適応する能力(capacity for successful adaptation)」(Norris et al. 2008 : 129)をあげ、レジリエンスを次のように定義している。「攪乱後、機能と適応の正の軌道へ向けて、一連の適応能力を結びつける過程」(a process linking a set of adaptive capacities to a positive trajectory of functioning and adaptation after a disturbance.)。また、この定義にもとづき、コミュニティ・レジリエンスを「攪乱後、コミュニティを構成する人たちの機能と適応の正の軌道へ向けて、一連のネットワーク化された適応能力を結びつける過程」(a process linking a set of networked adaptive capacities to a positive trajectory of functioning and adaptation in constituent populations after a

disturbance.) と定義している (Norris et al. 2008 : 130-1)。

災害後のコミュニティ・レジリエンスに焦点をあてた研究を行っているダニエル・アルドリッチは、『*Building Resilience : Social Capital in Post-Disaster Recovery*』(レジリエンスの構築：災害からの復旧・復興におけるソーシャル・キャピタル)のなかで、次のことを問題にしている。「災害後、回復のはやいコミュニティがある一方で、食料、水、シェルター、雇用という基本的ニーズを満たすことにも苦勞するコミュニティがある。生存者が戻り、新たな居住者を引き寄せる地区がある一方で、都市のなかには、人影がなくなり、ゴーストタウンになる地区もある」(Aldrich 2012 : 1-2)。

なぜ、国や地方公共団体、NPO、NGO などによって同じ支援が行われるにもかかわらず、災害後、回復する地区とそうでない地区が存在するのか。アルドリッチは、回復のはやいコミュニティの条件を探るというアプローチをとり、そこにレジリエンスを高めている要因を見いだそうとする。まさに医療における健康生成の考え方のコミュニティへの応用が、アルドリッチの地域コミュニティのレジリエンスの考え方になっている⁽³⁾。そして、アルドリッチがレジリエンスの高いコミュニティの条件として注目するのが、ソーシャル・キャピタル(社会関係資本)という、こんにちのもう一つのキーワードとも言えるものである。この地域コミュニティにおけるレジリエンスとソーシャル・キャピタルとの関係について、東日本大震災後の、主に社会学における議論を再検討することが本稿のテーマの一つである。社会学の議論を検討するのは、社会学とはまさに人や集団の関係をこれまで研究してきた学問分野だからである。

ところで、レジリエンスについては、「柳の枝」にたとえられていたように、回復する力、つまり元の状態に戻る力ととらえられることもある。しかし、「レジリエンスは必ずしも元の状態への『回復』を意味するわけではない……レジリエントなシステムには戻るべきベースラインが存在しないこともめずらしくない——絶えず変化する環境に合わせて流動的に自らの姿を変えつつ、目的を達成するのである」(Zolli and Healy 2012=2013:19)⁽⁴⁾。「しなやか」というやわらかい表現は、さまざまな状態を指しており、わかりやすく感じられる一方、あいまいになるという問題がある。

災害からの復興は、「元の状態への回復」(人や集団、社会については、実際にはこれは不可能である)を目指すのか。これは、被害が広域におよび、また高齢化、過疎化が進む地域が被災地となった東日本大震災において問題となっている点でもある。多額の費用をかけてインフラストラクチャーなどを元の状態に戻したとしても、

その後、そこはどうかになるのか。こうした点から、たんなる「復興」ではなく、この機会に、それまではできなかった、より良いまちづくり、地域形成を目指す「創造的復興」という発想も生じる。しかし、その問題点について塩崎賢明は、阪神・淡路大震災の経験から次のように指摘している。

「創造的復興」の光の面は、高速道路や鉄道や港湾施設などのインフラストラクチャーである……インフラの再建や開発事業も光り輝いて見えるのは外見だけで、内実は黒い影に包まれている。空港や再開発は計画を推進した神戸市自身も本音のところでは成功とは思っていないだろう。光があたったのは、工事を請け負った業者だけかもしれない……被災者の生活再建には創造的復興の「影」が色濃く現れている。(塩崎 2011 : 33-4)

塩崎が「被災者の生活再建」において重要だと指摘するのは「コミュニティ」であり、この表現を用いてはいないが、「ソーシャル・キャピタル」である。そして、地域コミュニティにおけるソーシャル・キャピタルを培ってきたものとして重要になるのが、その地域の「伝統」と「文化」である。赤坂は、次のように述べている。

震災から2,3カ月は、生き延びるために何をなすべきかが、当然ですけれども最優先のテーマでした。ようやく、分断されて、崩壊しかけているコミュニティや、人と人との絆などを再建するために、文化が必要とされる段階が訪れようとしています……とりあえずは食べものや住むところが必要です。しかし、これからどうやってムラを再建しつつ生きていくのか、それがテーマとして浮上してくる瞬間があります。そのとき、祭りや民俗芸能といった、それぞれの地域の歴史や風土に根ざし、アイデンティティを支えている文化にたいして、あらためて関心が向くことになるのでしょうか。(赤坂 2012: 27-8)

そして赤坂は、「記憶」を「残す」ことの必要性について指摘し、またその決意を語っている。

被災地にはきわめて多様な現実が見いだされます。地形もさまざまだし、小さなムラごとに湾ごとに、歴史も文化も風土も異なっています。この震災で、海辺の風景は大きく変わってしまった。被災地がかつての風景を取り戻すことはむずかしいのかもしれない。地域社会のアイデンティティの拠りどころとして、失われた記録を復元・回復してゆくこと

が必要です。記憶のアーカイブをつくりたい。これから先の長い時間につながっていく記憶をいかに残すか、みなで考えねばならないと思います。(赤坂 2012 : 19)

草薺に覆われていく被災地の風景は、3・11の記憶そのものを暴力的に消去していく風化の象徴のようにも感じられました。たくさんの記憶の掘り起しを進めなければならないと、あらためてひそかな覚悟を固めていました。(赤坂 2012 : 53)

こうした「文化」や、(おそらく「誰でも」というわけではない特定の「誰か」によって)掘り起され、選択され、文字化・ストーリー化され、「記憶のアーカイブ」に保存される「記憶」とは、いったいどのようなものなのだろうか。そもそも「記憶」と復興は、どのようにかわるのだろうか。この点についても社会学の研究のいくつかを検討しながら考察することが本稿のもう一つのテーマである。つまり、本稿のテーマは、地域コミュニティにおける「レジリエンス」(コミュニティ・レジリエンス)と「ソーシャル・キャピタル」と「記憶」との関係について考え、またそれらにかかわる問題点を検討することである⁽⁵⁾。

2. コミュニティ・レジリエンスとソーシャル・キャピタル

災害の影響を軽減するうえでのソーシャル・キャピタルの重要性への認識が高まっているにもかかわらず、標準的な災害支援の手順では、被害を受けた物質的インフラストラクチャーの復元に主に焦点があて続けられている。(Aldrich 2012 : 127)

上でとりあげたいいくつかの引用にも見られるように、災害後の復旧や復興において、あるいは災害時や災害以前においても、地域コミュニティやソーシャル・キャピタルの重要性が指摘され、災害におけるレジリエンスについての多くの研究のなかでも、レジリエンスの高さとソーシャル・キャピタルの豊かさの関係が実証的にも示されている。ノリスらは、「コミュニティ・レジリエンスの理論の発展にとって、ソーシャル・キャピタルはきわめて関連性の高いテーマである」(Norris et al. 2008 : 137)と指摘しており、ゾリとヒーリーも次のように述べている。「強力な社会的レジリエンスの存在するところには、必ず力強いコミュニティが存在する……明らかになったのは、混乱に対処し、傷を癒すためにレジリエントなコミュニティが拠り所とするのは、深い信頼に根ざしたインフォーマルなネットワークだということ

だ」(Zolli and Healy 2012=2013 : 21)。つまり、コミュニティ・レジリエンスにとってソーシャル・キャピタルが「拠り所」になる。

ソーシャル・キャピタル、または社会的ネットワークは、地域コミュニティのレジリエンスという集団のレベルだけでなく、個人のレジリエンスにとっても大きな役割をはたす。「特定のコミュニティの一員が逆境から立ち直る力は、良好に機能する社会的ネットワーク(友人、家族、宗教団体、地域団体、充実した職場、行政による支援やサービスを利用できる環境)によっても強化される」(Zolli and Healy 2012=2013:170)。ソーシャル・キャピタル(社会関係資本)という概念をはじめで使用したといわれているL・J・ハニファンは1916年に次のように指摘していた。

個人がひとり取り残されていれば、社会的には弱く頼りないものである……しかし彼が近隣との交流を行い、そしてその近隣が他の近隣と交流することにより、そこには社会関係資本が生まれ、それは直ちに彼の社会的必要を満たし、またコミュニティは全体として、その部分すべての協力によって恩恵を受け、また同時に個々人も、その属する組織の中に、隣人たちの援助や共感、そして友情という利益を見いだすこととなる。(Putnam 2000 = 2006 : 14-5 からの引用)

ソーシャル・キャピタルについては、個人的な資源としてとらえる考え方⁽⁶⁾と集合的な資源としてとらえる考え方に大きく分けられるが、本稿では、ソーシャル・キャピタルを次のように集合的資源としてとらえるロバート・パットナムの定義を用いる。「社会関係資本が指示しているのは個人間のつながり、すなわち社会的ネットワーク、およびそこから生じる互酬性と信頼性の規範である」(Putnam 2000 = 2006 : 14)。

アルドリッチは、ソーシャル・キャピタルを社会的ネットワークとしてとらえ、社会的ネットワークが災害からの復旧・復興においてどのような役割をはたしたのかを、4つの災害、関東大震災、阪神・淡路大震災、スマトラ島沖地震、自らも被災者となったハリケーン・カトリーナについて、量的研究とともに聞き取り調査を行い、「高いレベルのソーシャル・キャピタルは、社会経済的条件、人口密度、被害の程度、援助の程度といった一般によく言及される要因以上に、復旧・復興のコア・エンジンとしての役割をはたす」(Aldrich 2012 : 15)ことを示した。「4つの事例の研究によって明らかになったことは、ソーシャル・キャピタルのある地域ほど、連携された取り組みと協働によって、危機からの復旧・復興

が効果的かつ効率的であったということである。これらの事例での復旧・復興は、社会的資源が、大災害の前、災害時、災害後におけるレジリエンスを高める仕組みであることを示している」(Aldrich 2012:149)。アルドリッチはまた、「規範、情報、信頼を提供することによって、密な社会的ネットワークはよりはよい回復をもたらすことができる……災害時やその直後、レジリエンスに必要な資源を提供するのは、企業や政府機関、NGO ではなく、近隣の人たちや友人たちである」(Aldrich 2012: 45-6) と述べている。したがって、繰り返しになるが、地域のレジリエンスにとって、社会的ネットワーク、つまりソーシャル・キャピタルが鍵になる。

他の国内外の災害でも、災害時や災害直後の地域コミュニティの人の働きが、多くの研究や報告などにおいて取り上げられているが、東日本大震災もその例外ではない⁽⁷⁾。

〔岩手県〕大槌町では、地震発生後から、地域内の避難支援・避難広報に使命感をもつ人びとによる活動が展開された。消防団員は水門を閉鎖し、避難広報をし、また危険域への立ち入りを封鎖した。民生委員ほかの人びとは、避難支援を開始し、町会の関係者たちは避難所の立ち上げ・運営に着手し、物資の持ち寄り、炊き出し、配給など、被災者と非被災者の連携を順次展開していった。消防団と一般住民は協力して、津波にのまれた人を救助するなど、救急救命に携わった。地元の医師、福祉施設関係者もこうした救急・救命活動を担った。かくして公務員でない民間人（非常勤の公務員、特別公務員などの民間の篤志家を含む）たちが献身的に、誰かを助けようとした。(麦倉哲・吉野英岐 2013: 406-7, 亀甲カッコ内引用者)

田中重好は、避難行動における集団の重要性について、東日本大震災での避難行動の分析から、「集団的な状況のなかでは、集団が避難行動に適切に誘導するという『正の働き』をするとともに、集団が個人個人の避難行動を抑制するという『不の働き』をすることもあることが分かる」(田中 2013:378) としながらも、今回の場合、「小学校、集落、事業所での死亡状況の概括的な検討から、『集団や組織のなかにいたこと、あるいは社会的なネットワークに結びついているという社会的状況が、津波からの避難行動を促した』、あるいは『集団のなかにいたことが安全な避難につながる可能性が高い』といえるのではないだろうか」(田中 2013: 380) と述べている。さらに、こうした点から田中は、「個人」が情報を受け取れることを想定した災害情報の伝達についてのモデルと対

策の問題点を指摘している。「行政を中心として、中央から警報を発令して住民に伝達する方式（トップダウン方式）の避難行動を促す方法では、十分効果を発揮しない。むしろ学校や地域の現場で、集団の力を活かした避難行動を考える必要がある」(田中 2013: 382)。

災害時だけでなく、災害後の地域コミュニティの役割について金菱清と植田今日子は、宮城県気仙沼市唐桑町での海難者を集団で供養する儀礼とともに、宮城県名取市箱塚桜仮設住宅で立ち現れた自治会の「過剰なコミュニティ」を取り上げている。後者の仮設住宅の自治会では、自治会による被災地ツアー、仮設住人のゴミのチェック、自治会主催による居酒屋などを行った。被災地ツアーによって、「一緒に泣く場を設けることで、災害死がコミュニティレベルで『共有化』され」(金菱・植田 2013: 396)、一人だと飲みすぎてしまい、アルコール依存症になるリスクが高くなるため、共に飲み、話し、食べる場を自治会が作ったのである。これらの活動は、「通常は個人あるいは家族や親族の単位で対応すべき事柄を自治会という社会組織（コミュニティ）で引き受け、感情の共有化もしくは共同化を図ろうとするものである」(金菱・植田 2013: 396)。

金菱と植田は、「こうした自治会の過剰な取り組みを批判的にたとえるならば、さながら監獄における規律のようである。しかし、もう少し深く読み込んでみると、異なる見方ができる」(金菱・植田 2013: 395) とし、こうした地域コミュニティを「災害パターナリズムに抗する」ものと位置づけている。金菱と植田は、パターナリズムの特徴を江崎一朗の定義に依拠して「干渉行為が干渉される者のためであるという『善行的要素 (beneficence)』にもとづいている点」とし、「災害パターナリズム」として「元住民たちの災害危険区域指定の解除と現地再建の意向を退ける」「市」の対応をあげている(金菱・植田 2013: 388, 398-9)。

しかし、ここで検討を要するのは、なぜ市の対応が「災害パターナリズム」になるのにたいして、コミュニティの対応は「災害パターナリズム」にならないのかという点である。「干渉行為が干渉される者のためであるという『善行的要素』」という点だけでは、この両者の行為も、またボランティアなどの行為も区別されえない。それぞれのものにパターナリズム的性格があり、地域コミュニティにもパターナリズム、男性中心の「父権主義」(女性へのさまざまな形での暴力など)にかかわる問題があり、この点は東日本大震災でも問題になった(正井禮子 2013 など)。したがって、災害時、災害後、減災における地域コミュニティ、ソーシャル・キャピタルの力を強調する議論において、それを過剰に美化すること(まさに「過剰なコミュニティ」にすること)は問題である。

アルドリッチは「ソーシャル・キャピタルは、諸刃の剣でありうる」(Aldrich 2012:2)と繰り返し指摘している。アルドリッチは主に、ある集団のソーシャル・キャピタルが、その集団の周辺的な人びとを差別することにつながることを問題にしているが、集団内の権力関係や差別についても忘れてはならない。この点はスーザン・オーキンの多文化主義にたいするフェミニズムの立場からの批判と重なり合う (Okin 1999)。文化が、その人たちのアイデンティティにとって重要なものであり、どの文化もそれぞれに尊重されるべきものであったとしても、女性を差別する文化を保護する理由にはなりえない、というのがオーキンの立場である。その集団、人びとのアイデンティティとなりうるのは、地域(その文化)も同じである。

金菱と植田は「コミュニティに注目するのは、東日本大震災後の災害リスクが、ことさら津波の浸水線や浸水深を基準に測られることが多く、それにもとづく土地の利用規制が、ときにコミュニティを浸水線で分断したり暫定的な存在にしてしまうことが見受けられるからである」(金菱・植田 2013:389)としているが、コミュニティの「分断」は、市の土地の利用規制といった「災害パターンリズム」によってのみ生じるものではないし、また物理的なものともかぎらない。赤坂は、災害後の「分断のライン」の存在を指摘している。「震災以降、ある時期まではおたがいの差異は消して、みながつながることを願いました。地域のコミュニティが生存の危機を乗り越える支えになりました。しかし、場面は大きく転換しています。それぞれの家族が、暮らしをどう再建するか、住居や仕事をどのように確保するか、それをあくまで具体的な問いとして突き付けられています。助け合える部分と助け合えない部分がいやおうなしに生まれます」(赤坂 2012: 61-2)。

単純に地域コミュニティを美化し、行政を批判するのではなく(弱い立場の側につくという受容しやすいフレーミングではあるが、その問題点をふまえたうえで使用し)、以上のような点を考慮する必要はあるが、国や地方公共団体の対応と、地域の人びとなどとの対応には確かに異なる面が存在する。この点を、三井さよは、制度的対応と個々の人の生活や思いの「固有性」の「隙間」として指摘し、それを「阪神・淡路大震災におけるボランティアたちは、それとして発見し続け、また同時にボランティアとして担おうとしてきたのだともいえる」と述べている(三井 2014:133)。三井は「支援」について次のように指摘している。

病気などの異常の後ろには、その人の生活のありようがある。そしてその生活のありようとはまた別

に、その人なりの思いがある。それらを踏まええない限り、支援はその人に届くものとはならない……一般には、どうしてもまず疾患や、アルコール依存症、認知症など、「結果」として出てきた問題や症状から見てしまうだろう。だが仮設住宅では、住民たちの「それ以前」の状況、そもそも背景にある生活のありようと、それぞれの思いが、ボランティアたちには見えていた。ボランティアたちはそれらに取り組まなければならないと考えたのである。(三井 2014:129)

これは疾患などについて述べたものであるが、こうした点は他の被害の状態についてもあてはまる。制度的な支援や対応は、特定の「結果」を特定の基準で測り、対応するが、そこでは、その結果以前、あるいは背景にある個々の人の固有性や思いは捨棄される。『隙間』は確実に埋められるものではない……ただ、制度的な支援を前提にしてしまえば、『隙間』は見えなくなり、しばしば存在すらしないことになってしまう」(三井 2014:133)。

しかし、三井が、ボランティアたちが「発見した」とする『「それ以前」の状況』、これを「さらにそれ以前からの状況」を見て、知っている人たちが、同じ地で生活してきた人たちのなかには(さまざまな職にかかわる形でも)存在するだろう。農林漁業といった仕事において地域の人とかかわる可能性の高い職の多い、つまりソーシャル・キャピタルの豊かな東日本大震災の多く被災地では、地域のなかに「さらに以前からの状況」を「発見」する必要もなく、「わかっていた」人たちも多いたことだろう。ボランティアの多くは、「災害後」からかわり、また「干渉行為が干渉される者のためであるという『善行的要素』にもとづいている」であろう名前も顔も知らなかった見知らぬ他者としてかわり始める。

たしかに、同じ地にある程度の期間生活していたとしても、さらに家族であったとしても、その人の生活や思いの固有性を理解しているということを前提にすることはできず、制度との間でなくても、そこには必ず「隙間」が存在する。また、他所から一時的に来て、また他所に帰る、信頼できそうな善意の他者であるからこそ話せることもあるだろう。しかし、ある地域のなかで生活をしているということによって、さまざまなものが共有されるようになる。そのなかでも特に重要といえるのが「記憶」の共有である⁽⁸⁾。地域でのソーシャル・キャピタルにしても、コミュニティ・レジリエンスにしても、あるいは三井のいう「隙間」にしても、この記憶の共有が鍵になっている。「どんな社会秩序であれ、それに従う者たちが記憶の共有を前提条件とすることは暗黙のルー

ルである。社会の過去について、人々の記憶が分かれてしまうと、その部分について社会のメンバーは経験や仮定を共有することができない」(Connerton 1989=2011: 4)。

ゾッリとヒーラーは「明らかになったのは、混乱に対処し、傷を癒すためにレジリエントなコミュニティが拠り所とするのは、深い信頼に根ざしたインフォーマルなネットワークだということだ」と指摘していたが、インフォーマルなネットワークの信頼を成り立たせるもの、それはその人について、またその人とともに行ったこと、話したこと、その人の家族や知り合いなどについての記憶の共有である。

制度的な対応と支援の問題は、記憶の共有の欠如にもかかわらず、特に「欠如モデル」的な発想での対応や支援は、そうした傾向を持つ。「STS〔科学技術社会論〕研究者は、無知な公衆に対して科学知識を与え啓蒙するという考え方を、『欠如モデル (deficit model)』とよび批判した……公衆は単に無知なのではなく、公衆なりの独自の知識をもっている……こうした文脈に依存した知識は『ローカルノレッジ (local knowledge) とよばれる』」(藤垣裕子・廣野喜幸, 2008: 10, 亀甲カッコ内引用者)。地震にしても津波にしても、建造物にしても、防災や減災、そして復旧や復興においても、それぞれが科学知識にかかわる。そして科学知識をもとに計画が作られ、実施される場合、そこにローカルな場の(ある立場から見れば無知である)素人たちの、長年の生活のなかでの知識、つまり記憶が入り込む余地はない、あるいは軽視される⁽⁹⁾。こうした制度的な支援や対応の問題は行政だけの話ではない。「『隙間の発見』は、ボランティアが一定の型に押し込まれない多様性・複数性を有することと不可分である……支援の担い手もまた、制度化すればいいというものではない」(三井 2014: 134)。この点は東日本大震災後、問題にされるようになってきているが、ボランティアにしても、さらにはコミュニティにしても、制度化にかかわる問題が生じる可能性がある。制度化により、より速い、効率のかつ組織的な対応が可能になるという側面もある。しかし、そこにおいて「隙間」が拡大する。

三井は災害時の個々の人の固有性について次のように指摘している。「災害時は、非常事態であるだけに、その人のこれまで生きてきた人生や育んできた関係性、その人なりの思いが問われてしまったり、想起されたりする。いわば、個々の人の固有性が浮上する瞬間である」(三井 2014: 130)。個々の人の固有性は「想起される」もの、つまり記憶である。そして個人の記憶は、コミュニティにおける社会的、集合的な記憶と結びついている。

3. 地域のレジリエンスと記憶

儀礼が有意味と考えられるのは、儀礼が儀礼以外の全行為、つまりあるコミュニティの全生活についての重要性をもつからである。儀礼はそれを行う人々の生活に、価値と意味を与える機能をもつ。

(Connerton 1989=2011: 78)

東日本大震災後、かなり早い時期から祭りや伝統芸能などが再開された被災地もあった。なぜそうした祭りなどの儀礼がいち早く復興されたのであろうか。上のコナトンの引用もそれを説明しているが、他には、たとえば次のような説明がなされている。赤坂は、そうした祭りなどが、「自分たちが生き延びたこと、これからも生きていくのだということを、みなが実感」する機会、「対立や分断を越えて、人と人をつなぎあわせるための、かけがいのない文化の仕掛け」(赤坂 2012: 27, 161)と述べている。麦倉と吉野は、釜石市鶴住居町片岸地区では、地区にある高館稲荷神社の「本殿は高台にあり、無事だったが、国道沿いの鳥居が破壊された。しかし、鳥居は復興のシンボルとしていち早く再建され、虎舞も12年10月14日に復活披露されるなど、地域住民が共同で築き上げてきた営為が再び見られるようになった」(麦倉・吉野 2013: 409)といったように、再建された鳥居を、「復興のシンボル」として、つまり赤坂と同様に、生き残りまた生き続けていくシンボル、さらに地域の共同性のシンボルとして位置づけている。こうした祭りなどの位置づけにたいして植田今日子は、災害後の生活もままならないような状況下での儀礼の再開に、「日常的に繰り返してきた祭りにそなわる、生活を再創造する仕掛け」を見いだしている(植田 2013: 44)。植田は川島秀一の議論にもとづき、次のように論じている。

非常事態から抜け出すこと、つまり災害から回復していくことは、「直線的な時間」をいかに「回帰的な時間」にしていけるかが問われることになる。「回帰的な時間」とは、季節や年中行事のようにまったく同じではないものの、繰り返し同じ周期でやってくるのが想定された、過去から未来に向かって繰り返らせん状に進行していく時間である……ルーティンや回帰的時間をいかにとり戻せるのかということは、あらゆる非常事態下におかれた社会にとって共通の課題であろう。(植田 2013: 54)

「日常」はありふれたものであり、繰り返し(ルーティン、つまり「いつもの」こと、型にはまった行動、日課など)から成り立っている。日常が常ならざるものとなっ

たとき、社会にしても個人にしても、日常を取り戻す、つまり日常を新たに創り出す必要がある。レジリエンスとは、非-日常となった状態に適応し、新たな日常を創り出す力である。新たに、というのは、社会、そして個人において、元どおりに戻るといったことではないためである⁽¹⁰⁾。一方向に直線的に流れる時間と常に変化する状況のなかでのルーティンは、同じものの反復では維持できない。「日常」は個人や集団の細かで、創造的ともいえるレジリエンスの作用によって維持されている（こうした社会の構造や人びとの相互作用、実践が社会学の中心をなすテーマをなしてきた）。

日常が大きく崩れ、個人がルーティンを取り戻そう（創出しよう）とするとき、自らの日常の社会的ネットワークを修復し、作り直す必要がある。災害時もそうであるが、日常と異なることが生じた可能性のあるとき、自らの社会的ネットワークのなかの（一部の）人たちの状況を確認し、連絡を取ろうとする（つながっていることを再確認しようとし、確認できないと不安に陥る）。人も日常、そしてルーティンのきわめて重要な構成要素である。したがって、ソーシャル・キャピタルが豊かな地域では、地域の社会的ネットワークを取り戻すことが、そのネットワークのなかのそれぞれの人の「日常」を「取り戻す」うえでの鍵となる。そして、その地域の社会的ネットワークが、日常が大きく壊れる前と後で実際には変わったとはいえ、「連続している」ことの象徴、つまり壊れた日常が戻ったことの象徴になるのが、地域コミュニティの儀礼（また神社など儀礼のさまざまな空間）である。コナトンは「すべての儀礼は反復であり、反復は過去からの連続性を自ずと暗示する」（Connerton 1989=2011：78）と述べ、祭りについて次のように論じている。

それぞれの定期的な祭りにおいて、参加者はあたかも同じ時間を過ごしているかのように感じる。前年の祭りと同じであり、1世紀あるいは5世紀前の祭りと同じであるともいえる。これらの重要な期間は、質的に同一のものとして現れ、経験されるよう組織される。それゆえまさにその本質から、儀礼的時間は無限に反復可能である。（Connerton 1989=2011：117-8）

社会や人は大きく変化しても、また実施する状況や場が変化したとしても、儀礼は、儀礼じたいとそれを行うコミュニティが過去、そしてこれまで「質的に同一」のもの、変わらないものとして経験される。儀礼においては、受け継がれてきた衣装や道具、言葉が使用され、そのときどきで変わってゆく個人の固有性を見えなくす

る装いがなされることも多い。そのありふれた日常とは異質な時間と空間のなかで、コミュニティの「質的に同一」なものの反復・回帰が経験される。しかし、日常と異質である儀礼の時間と空間の作用は、それが行われる特定の日時に限定されるものではない。儀礼はそのコミュニティに周期的にめぐってくるもの、反復され続けるものであり、「儀礼が儀礼以外の全行為、つまりあるコミュニティの全生活についての重要性をもつ」。それは、「変わらないもの」「受け継がれてきたもの」の象徴であるとともに、コミュニティの社会的ネットワークと、そのなかの諸個人の生活を「変わらないもの」との関係から意味づけるものとなりうる。それをめぐって、日常生活のさまざまな側面が関連づけられる。

ゾリとヒーリーは個人のレジリエンスについて、「文化的アイデンティティもレジリエンスを高める役割を果たしている」（Zolli and Healy 2012=2013：169）と指摘しているが、コミュニティにおける「変わらないもの」の象徴となる時間と空間が、個人のみならず、コミュニティのレジリエンスを高める。

東日本大震災では、個人から行政（私的なものから公的なもの）にいたるまで、さまざまな記憶や記録・情報の喪失と救済、保存、データ化、クラウド・コンピューティングなどが問題となったが、古文書や近代文書などの「歴史資料レスキュー」について佐藤大介は、「今回の活動では……自らのよりどころとなる『ふるさとの歴史』を知っておきたいという、地域社会の強い要望に基づいているとことが特徴だと考えられる」（佐藤 2013：213）と述べている。また、上で引用したように、赤坂は、「地域社会のアイデンティティの拠りどころとして、失われた記録を復元・回復してゆくことが必要です。記憶のアーカイブをつくりたい」と述べている。

赤坂が「記憶のアーカイブ」として、どのような記憶を集め、どのように保存し、誰が、どのように使用することを考えているのかはわからないが、地域コミュニティの人びとの記憶には、保存される対象となる歴史的資料や語り（ナラティブ）などとは質的に異なるものも存在している。たしかに、歴史的資料などは、自分たちの「よりどころ」や「アイデンティティのよりどころ」の一つにはなりうるが、むしろアーカイブ化されない記憶が、ソーシャル・キャピタル、そしてコミュニティ・レジリエンスにとっての基盤をなしている。その典型が儀礼であるが、その儀礼はアーカイブに収められたものではなく、地域の人びとによって実際に行われる（無限に反復される）という点にそのポイントがある。コナトンは、記念式典についてであるが、次のように社会的記憶にとっての遂行性（パフォーマンスィビティ）の重要性を指摘している。「もしも、社会の記憶というものが存

在するとすれば、多くの場合、それは記念式典のなかに見いだせる。しかし、記念式典は遂行的である限りにおいてのみ、記念となる。遂行性は習慣という概念をぬきに考えられない」(Connerton 1989=2011:7)。

コナトンも指摘しているが、いつものこと、あたりまえのことは、特に意識されることもなく日常のなかに埋め込まれており、特に語られることもない。言うまでもないこと、わざわざ言うことすら思いつかないことの集積が日常である。それは生活のなかでただ遂行される⁽¹²⁾。そして、上で指摘したように「日常」とそこでの社会的ネットワークがコミュニティのレジリエンスにとって鍵になるとすれば、それは遂行される微細な記憶の集積から成り立っていることになる(それら多彩な個々の記憶をコミュニティの記憶としてまとめあげるものの一つが儀礼である)。その「あたりまえ」の「いうまでもないこと」を発見し、記録するのが「よそ者」としての他者ともいえるだろうが、発見されるものは一部にすぎない。「文書による証拠の限界のひとつは、自分が当然と思っていることをわざわざ文書にする者はほとんどいないところにある」(Connerton 1989=2011:29)。これは自己にも他者にもあてはまる⁽¹³⁾。そして、ここに三井が、ボランティアが「発見」という個人の生活の固有性ではとらえることのできない記憶の側面が存在しており、コミュニティ、そしてソーシャル・キャピタルのレジリエンスの重要な側面が存在している。

コナトンは「村」のコミュニティについて次のように述べている。「村は連続的なコミュニティの歴史を非公式に構築する。その歴史においては、誰もが描写に参加し、誰もが描写の対象となり、そして、描写という行為は決してやむことがない。このため、日常生活のなかに自己のプレゼンテーションの入り込む余地はほとんどない。それほど深く、個々人が記憶を共有しているからである」(Connerton 1989=2011:28)。自己のプレゼンテーションとは、自分がどんな者なのかを相手に明かすことである。ボランティアは、相手に自己紹介をすることもあろうし、その人やその地域のこれまでの生活などについて聞くこともあるだろうが(これは研究者も同じである)、そこに、記憶の共有についてのそのコミュニティの人たちとの間にある、もうひとつの「隙間」が存在する。そして、制度との「隙間」を問題にするとすれば、このもうひとつの「隙間」もまた問題にする必要があるのではないだろうか。

コミュニティのレジリエンスとソーシャル・キャピタルを考えるうえで、地域のアイデンティティとしての建造物や儀礼などの(他者にとって)目につきやすい記憶だけでなく、日常を形づくっている、ありふれた、遂行されることのなかに現れる記憶についても考える必要が

ある。

ところで、被災したコミュニティで共有される記憶は、災害「以前」のものだけではない。一見、この点と関係がないように見えるかもしれないが、塩崎は阪神・淡路大震災後の「コミュニティ喪失」の問題について次のように指摘している。

復興公設住宅は38000戸建設され、新しく、設備もととのっており、家賃も安かったので多くの居住者が住宅そのものには満足したが、最大の問題は、コミュニティの喪失であった。ここでも入居選考は抽選で行われ、従前居住地から遠く離れた団地では、かつての人間関係を失った……まわりに知り合いもなく、元の町や、なじみの店や病院も遠く、孤立した状況下で部屋に閉じこもる生活になった人も多い。そうした社会的孤立の最悪の結果が孤独死である。(塩崎 2011:34)

「まわりに知り合いもなく、元の町や、なじみの店や病院も遠く、孤立した状況下で部屋に閉じこもる生活」、こうした説明は、災害後の被災者の生活についてしばしばなされている。しかし、こうした状態は、さまざまな理由で地元(故郷や故国)を離れる人たち、住み慣れた地域を離れる人たちの多くが経験するだろう。したがって、このことだけでは、被災者が特別な問題を抱えているということにはならない。つまり、これだけでは説明が著しく足りない。被災者は災害によって、そこから「離れる」ことが可能な「元の場所」じたいを失う。また「そこ」に戻る可能性じたいも失う。物理的に戻ったとしても、そこは「元の場所」ではない。こうしたことが、ある程度の時間をかけてではなく、ある特定の日時において生じる。そのことが「まわりに知り合いもなく、元の町や、なじみの店や病院も遠く、孤立した状況」を特別なものにする。そうした経験と可能性の喪失という記憶も共有され、それがコミュニティというものを特別なつながりにもするのである。

今井信雄は、「……ひとりひとりの『東日本大震災の経験』は同じではない。さまざまな立場で、さまざまな状況において、『東日本大震災』を経験したのである」(今井 2014:223)と指摘しているが、経験は完全に個々バラバラのものではない。「自分たち」にとっても、また他者がその人たちをとらえ、理解する場合にも、経験、記憶のまとまりを創り出さずさまざまな力が存在している。今井は写真に注目しているが、「東日本大震災」という名称(名づけ)や場所の名称、被災者、災害弱者といった名称も、そうした力として働いている。「3.11」に生じた「東日本大震災」というとらえ方によって、同

じ災害による被災、被災者が生じる。しかし、それがまさに生じたときには、被災者にとっても、災害にしても、被災にしても、そうしたまともは存在していなかった。被災についてのまともは後から、記憶の再編のなかで生じるのである。

4. おわりに

田中は、「『人と人とのつながり、集団との関わり』のなかにある個人の危機対応行動を考えることが、説明図式としても対策の前提としても大切である（これは、防災対策における『社会の発見』につながってゆく）」（田中 2013：381）と述べている。また、ノリスは次のように指摘している。「コミュニティ・レジリエンスについての議論では、しばしば『全体はその部分の総和以上である』と指摘されているが、これはレジリエントな個人の集まりが、必ずしもレジリエント・コミュニティになるわけではないことを意味している」（Norris et al. 2008：128）。

「社会の発見」, 「全体はその部分の総和以上」, これらはいずれも社会学では馴染みのある、社会学という学問を特徴づけてきた考え方といえるものである。つまり、防災・減災、復旧・復興において、その重要性が認識されるようになってきている（しかし、アルドリッチが指摘しているように、まだまだ物理的インフラストラクチャー中心で活用されていない）「ソーシャル・キャピタル」にしても「コミュニティ・レジリエンス」にしても、きわめて社会的ともいえる概念、視点なのである。

麦倉と吉野は大槌町での仮設住民意識調査（2012年）の結果から次のように述べている。「コミュニティの再建のなかで重要なことは、その地域社会の伝統や社会変動のなかで、生成してきた文化の所在や価値を認識することである。そして、地域文化を掘り下げ、災害文化として災害時に発揮された連帯の質を発見し、考察することである」（麦倉・吉野 2013：413）。スチュアート・ホールは、「文化は『共有された意味』にかかわる」（Hall 1997:1）と指摘しているが、この「共有された意味」は、過去の記憶の共有にかかわる。したがって、防災・減災、復旧・復興における「ソーシャル・キャピタル」と「レジリエンス」についての議論では、実際の社会的ネットワークのあり方や人びとの活動、経済的資源、情報などに焦点があてられることが多いが、現実的な即効性はないとしても、「ソーシャル・キャピタル」と「レジリエンス」への記憶のかかわりと記憶の共有について、社会学においてさまざまな点から研究されてきた日常の社会的な構成のあり方とともに再検討していく必要があるだろう。このことがコミュニティ・レジリエンスの高い地域コ

ミュニティのあり方を考えることにつながるはずである。

【付記】 本研究は、北東北国立3大学連携推進研究プロジェクト「3.11被災地と隣接地域の河川環境情報の発信と地域協働の流域づくりに関する研究」（研究代表者・倉島栄一）の成果の一部である。

【注】

- (1) resilience のカタカナでの表記は、レジリエンス、レジリエンズ、レジリアンズなどがあるが、本稿では引用以外、レジリエンスという表記を使用する。
- (2) 京大・NTTレジリエンス共同研究グループは、東日本大震災以前の2009年の『しなやかな社会の創造——災害・危機から生命、生活、事業を守る』において、2012年の『しなやかな社会の試練——東日本大震災を乗り越える』での基本的な考え方を展開している。NTTとの共同研究のためか、「しなやかな社会」でのクラウド・コンピューティングなどICTの重要性を中心に議論が展開されている。
- (3) 以上の点を考えると防災・減災については、あるいは復旧・復興については、医療社会学（健康と病気の社会学）などの研究から得られるものが多くあると考えられる（災害が医療や保健、心身の健康にかかわることは言うまでもない）。今後、いっそうこうした点からの研究が行われる必要があるだろう。
- (4) レジリエンスについては、バックアップを作っておくことの必要性を指摘する議論もある。たとえば、応急対応期における情報システムと同様に、「災害・危機対応においても多重性〔冗長性 Redundancy〕が必要だ」（京大・NTTレジリエンス共同研究グループ 2012；カッコ内引用者）。その一方でゾリとヒーリーは次のようにバックアップの問題点を指摘している。「バックアップという手段はコストを押し上げるため、平常時は効率の阻害要因として非難的になりやすい。さらに不都合なことに、バックアップは、状況が大幅に変化すると有効性をまったく失う可能性もはらんでいる」（Zolli and Healy 2012=2013：19）。
- (5) これらそれぞれの点や、相互の関連性についてのより詳細な検討は別の機会に行いたい。
- (6) こうしたとらえ方を代表する論者の一人であるナン・リンは、ソーシャル・キャピタルを次のように定義している。「人々が何らかの行為を行うためにアクセスし活用する社会的ネットワークに埋め込まれた資源」（Lin 2001=2008：32）。
- (7) つながりは犠牲をももたらす。「この地方には、コミュニティの絆がいまだに強く残っています。それが人々を支えたのです。『津波でんでんこ』とって、津波のときは人にかまわず、それぞれに逃げろという言い伝えのようなものがあります。まさしく犠牲のうえに築かれた真実の教えでしょう。それでも、逃げなかった人たちがたくさんいるのです。」「それが語り継がれねばならなかったのは、けっして『津波でんでんこ』になれない現

- 実があったからです」(赤坂 2012: 65, 82)。こうしたこととコミュニティ・レジリエンスとの関係については、さらに検討する必要があるが、つながりによる犠牲は、コミュニティ・レジリエンスを高めるとも言えるのではないだろうか。ソーシャル・キャピタルは、他者の行動の予期、信頼にかかわるからである。
- (8) 記憶だけでなく、共有地などもあり、東日本大震災の復興事業では、共有地の存在が問題になった地区もある(麦倉・吉野 2013: 408-12)。麦倉と吉野も指摘しているが、それは記憶の継承にかかわる問題ともいえる。
- (9) 当然、こうした形がすべてではない。宮城県七ヶ浜町の災害復興推進室復興推進係長であった遠藤裕一は次のように述べている。「持論ですが、その地域に一番詳しい人は役場の職員ではなくて、その地域に住んでいる人だと思うのですよ。だから、その地域をどうしたほうがいいか、そういう人に聞くのが間違いないと思っているので、それを計画に入れないわけがない、入れるべきだということがありました。いろいろな手法で、大学の先生が客観的に見て、こうやったほうがいいねということもいいのかもかもしれません。しかし、どうしたいかということに関しては、その地域の、その個々のニーズというか……その方々に聞かないで計画をつくるべきではないと、個人的に思っています」(自治体学会東北 YP 2012: 37-8)。
- (10) 9.11 以降、「new normal (新たな通常)」という表現がしばしば使われた(Norris et al. 2008:132)。こんにち、「ニューノーマル」という表現は別の文脈でも使用され、そちらの方が一般化している。
- (11) アーカイブに収められるであろうものの一つである、年代順に語られる記憶についてコナトンは次のように指摘している。それは「データにひとつのナラティブの形式をもち込むことになり、それがデータに異質の記憶のパターンをもたらす……異質のモデルとは、支配者集団の文化に起源をもつ」(Connerton 1989=2011: 31)。
- (12) ピエール・ブルデューの文化資本の分類にしたがって、記憶を身体化されたもの、客体化されたもの、制度化されたものに分けることができるだろう。アーカイブに保存された記憶は、制度化されたものといえ、したがって三井が指摘していた「隙間」がここにおいても生じる。「隙間」は変質をもたらすものでもある。
- (13) コナトンは次のように指摘している。「われわれは目にする人の肉体の輪郭に、すでにその人について抱いているあらゆる観念を詰め込む。そして、その観念こそが心の中で作り上げられたその人の全体像のなかで主要な位置を占めることになる。結局、それ(観念)は彼の頬の曲線を完全に満たし、非常に正確に鼻の線をなぞっていく。また、それはあたかも彼の声が透明の封筒にすぎないかのように、その声の響きの中に調和されて溶け込む。したがって、その顔を見、その声を聞いたときに、われわれが認知し、耳にするのはこの観念ということになる」(Connerton 1989=2011: 4)。これは人だけでなく景観や建物、儀礼などにもあてはまる。この点は「他の」文化を研究する場合に指摘される問題にもかかわる。被

災地の記憶のアーカイブはオリエンタリズムなどと異なるものになるのだろうか。

【参考文献】

- 赤坂憲雄, 2012, 『3・11 から考える「この国のかたち」——東北学を再建する』新潮社。
- Aldrich, Daniel P., 2012, *Building Resilience: Social Capital in Post-Disaster Recovery*, Chicago: the University of Chicago Press.
- Connerton, Paul, 1989, *How Societies Remember*, Cambridge: Cambridge University Press. (= 2011 年, 芦刈美紀子訳『社会はいかに記憶するか——個人と社会の関係』新曜社。)
- 藤垣裕子・廣野喜幸, 2008, 『科学コミュニケーション論』東京大学出版会。
- Hall, Stuart ed., 1997, *Representation: Cultural Representations and Signifying Practices*, London: Sage.
- 今井信雄, 2014, 「災害の記憶——写真・保存・時間」, 萩野昌弘・蘭信三編著, 2014, 『3・11 以前の社会学——阪神・淡路大震災から東日本大震災へ』生活書院, 223-44.
- 自治体学会東北 YP, 2012, 『七ヶ浜(宮城県)で考える『震災復興計画』と住民自治』公人の友社。
- 金菱清・植田今日子, 2013, 「災害リスクの“包括的制御”——災害パターンリズムに抗す津ために」『社会学評論』Vol.64, No.3, 日本社会学会, 386-401.
- 香坂玲編, 2012, 『地域のレジリエンス——大災害の記憶に学ぶ』清水弘文堂書房。
- 京大・NTT リジリエンス共同研究グループ, 2009, 『しなやかな社会の創造——災害・危機から生命, 生活, 事業を守る』日経 BP コンサルティング。
- 京大・NTT リジリエンス共同研究グループ, 2012, 『しなやかな社会の試練——東日本大震災を乗り越える』日経 BP コンサルティング。
- Lin, Nan, 2001, *Social Capital: a Theory of Social Structure and Action*, Cambridge: Cambridge University Press. (= 2008 年, 筒井淳也他訳『ソーシャル・キャピタル——社会構造と行為の理論』ミネルヴァ書房。)
- 正井禮子, 2013, 「災害と女性の権利——阪神・淡路大震災の経験は活かされたのか?」, 萩野昌弘・蘭信三編著, 2014, 『3・11 以前の社会学——阪神・淡路大震災から東日本大震災へ』生活書院, 207-222.
- 三井さよ, 2014, 「普通の固有な人としての『災害弱者』——支援の制度化とのあいだで」, 萩野昌弘・蘭信三編著, 2014, 『3・11 以前の社会学——阪神・淡路大震災から東日本大震災へ』生活書院, 122-136.
- 麦倉哲・吉野英岐, 2013, 「岩手県における防災と復興の課題」『社会学評論』Vol.64, No.3, 日本社会学会, 402-419.
- Norris, Fran H., Susan Stevens, Betty Pfefferbaum, Karen Wyche and Rose Pfefferbaum, 2008, "Community

- Resilience as a Metaphor, Theory, Set of Capacities, and Strategy for Disaster Readiness” , *American Journal of Community Psychology*, 41, 127-150.
- Okin, Susan Mollar, 1999, edited by Joshua Cohen, Matthew Howard and Martha C. Nussbaum, *Is Multiculturalism Bad for Women?* Princeton: Princeton University Press.
- Putnam, Robert D., 2000, *Bowling Alone: the Collapse and Revival of American Community*, New York: Simon & Schuster. (= 2006年, 柴内康文訳『孤独なボウリング——米国コミュニティの崩壊と再生』 柏書房.)
- 佐藤大介, 2013, 「東日本大震災での歴史資料レスキュー——宮城県・岩手県での活動と所蔵者・地域」, 平川新・今村文彦・東北大学災害科学国際研究所, 2013, 『東日本大震災を分析する 2 震災と人間・まち・記録』 明石書店, 201-14.
- 塩崎賢明, 2011, 「住宅復興とまちづくり——阪神・淡路大震災から東日本大震災へ」, 塩崎賢明・西川榮一・出口俊一・兵庫県震災復興研究センター, 2011, 『東日本大震災 復興への道——神戸からの提言』 クリエイツかもがわ, 32-53.
- 田中重好, 2013, 「東日本大震災を踏まえた防災パラダイム転換」『社会学評論』 Vol.64, No.3, 日本社会学会, 366-85.
- 植田今日子, 2013, 「なぜ大災害の非常時下で祭礼は遂行されるのか——東日本大震災後の『相馬野馬追』と中越地震後の『牛の角突き』」, 『社会学年報』 東北社会学会, No.42, 43-60.
- Zolli, Andrew and Ann Marie Healy, 2012, *Resilience: Why Things Bounce Back*, New York: Simon & Schuster. (= 2013年, 須川綾子訳『レジリエンス 復活力——あらゆるシステムの破綻と回復を分けるものは何か』 ダイヤモンド社.)